



MINATO TOKYO

Bulletin

みなと
ユネスコ

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/MITSUKO TAKAI PRES.
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL・FAX 03 (3434) 2233 発行人/高井光子

2015年3月1日発行 第139号

目次

P1 巻頭言「忘れえぬ一夜 in サウジアラビア」	P10-11 大使館訪問「フィリピン共和国」
P2-8 講演会「ミクロネシアから考える太平洋の中の日本 ～歴史が育む地域の『交流』とこれから～」	P12 新年会員懇親会
	P13 体験教室「書道」、「茶道」
P9 世界の味料理教室「ポルトガルのクリスマス」	P14 事務局便り / 編集後記

忘れえぬ一夜 in サウジアラビア

港ユネスコ協会理事 友金 守



「旅は道連れ、世は情け」
これは今なお国内でも、海外でも
営々と生きていると思う。旅では、
新しい出会いと発見が生まれる。
旅は一期一会の積み重ねだ。

今年1月、過激派組織「IS イスラミックステート」による日本人質事件のショッキングな報道を目にした時、40年近く前のサウジアラビアでの一夜の出来事が鮮明に蘇ってきた。かかる時勢のなか、中東で感動した思い出を書くには少々ためらいがあり、しかも、ずい分昔の話なので恐縮ではある。が、私の30余年にわたるサラリーマン生活の中で、心に残る貴重な体験の一つなので、披露させていただきたい。

1976年5月。当時の私は、現役の会社人間。若さに任せて、「伸ばせ貿易、豊かな日本」精神のもと、海外にも度々出かけていた。その時期に、サウジアラビアで起こった小さな出来事である。

バハレーンで乗り換え、サウジアラビアのダーランを経由して、サウジアラビアの首都ジェッダへ飛ぶ予定だった。ダーラン空港に私の体は無事到着したが、預けた荷物が到着していない。乗継のフライトの時刻は迫ってくる。どうしよう！ フロントにかけつけたところ、分かったのは「荷物は積み残された」ということだった。やっと荷物が到着したのは、乗継便が飛び立った後だった。

夜になり、薄暗い空港のベンチで、翌朝事務所の開くのを待つしかないと思いを抱えていた。その時、1人の男性が話しかけてきた。事の詳細を話したところ、彼が「自分の車でホテルを捜しに出かけよう」と言ってくれた。訪れた5カ所のホテルはどこにも空室がなく、途方にくれてしまった。しばらくすると、彼が「俺が怖くないか？」と尋ねた。即座に、「信頼しているよ。」と答えた。すると彼の顔が和らぎ、自宅へ招いてくれるという。彼の家に着くと、すぐに、焼き飯風の食事を用意してくれた。習慣上、奥さんは出てこない。ベッドとして、応接間の長椅子と、新品の毛布を提供してくれた。

お蔭で翌朝のフライトの予約もでき、朝、車で空港まで送ってくれた。固い握手をかわし、笑顔で見送ってくれた。明るい気持ちで訪問地ジェッダ空港に到着し、取引先の社長の出迎えを受けることができた。

3週間後に帰国し、すぐにお礼の電報を打ち、お礼の品を送付した。

あれから40年近く経った今もなお、見ず知らずの日本人の面倒を見てくれた彼の親切が忘れられない。時代が良かったのだろうか？

もし、成田空港で困っている旅行者がいたら、果たしてあそこまで親身に世話をすることできるかと、問われれば、恥ずかしながら、「ノー」である。

日本の「おもてなし」。果たして、あのサウジアラビア人のように、心をこめてできるだろうか。

ミクロネシアから考える — 太平洋のなかの日本

～歴史が育む地域の交流とこれから～

日時：2014 年 11 月 28 日（金）

会場：港区立生涯学習センター3 階 305 号室

講師 **今泉裕美子先生**

法政大学国際文化学部教授



太平洋に、豊かな恵みを得ながら、また深く関わってきた日本。しかし、戦前日本がミクロネシアの一部を「南洋群島」と呼び、約 30 年間にわたり統治したことあまり知られていません。

サイパン、パラオ、トラック等の島々に、沖縄、福島、八丈島、朝鮮半島等から大勢の人々が渡り、太平洋戦争では、現地の人と共に多くが犠牲となりました。

ミクロネシアと日本の歴史的関係、帰還者と島の人たちとの戦後の「交流」をご紹介いただき、太平洋の中の日本について考える機会となりました。

講師プロフィール

津田塾大学国際関係学研究科博士課程修了。
専門は国際関係学、ミクロネシア—日本関係史。
25 年にわたり国内外で聞き取り調査を実施。
米議会図書館等で南洋群島関係資料の整理、目録化に協力。
共著「21 世紀国際社会への招待」
編著「日本帝国崩壊期引揚げの比較研究 など



大学院に進学した 1980 年代後半から**日本統治下のミクロネシア（以下、南洋群島）**の研究を始めた。その当時南洋群島に関する歴史研究は殆どされてなかった。それは南洋群島統治に関する基本的な行政史料などの公文書が殆どなかったことにも一因があった。

まず、南洋群島に生きた人達を探して**聞き取り**をして歩くことと、**文書史料を探ること**から始めた。

聞き取り：（学生で渡航費用がなかったので）まずは国内に住む、南洋群島から引揚げてきた人達の話しを聞くことにした。研究を進めるなかで、南洋群島と沖縄の人たちが深く関わっていたことがわかり、さらに福島、東京（八丈島）などの人たちとの関わりも見えてきた。これら地域からなぜ南洋群島に移民に行ったのか、送り出した地域の歴史にも関心をもつようになった。

文書史料：アメリカ、ミクロネシア、台湾、韓国などで探したが、断片的な史料のみが散在しているとわかった。研究を始めて約 30 年になるが、聞き取りや史料から南洋群島という全体像をどう描いていくか、いまだ格闘中である。日本海軍が南洋群島を占領した時期の研究から出発して、今ようやく第二次世界大戦期に到達した段階である。

聞き取り作業のために、個々の人にアプローチをしてゆくうちに、南洋群島からの帰還者の会が日本各地に出来ていることがわかった。日本全体の帰還者組織としては、南洋群島協会があり（2005 年に活動を終了）、その他に大きな組織としては沖縄の南洋群島帰還者会がある。

沖縄には、同会の他に、南洋群島の同じ島で暮らした者同士の組織（サイパン会、パラオ友の会など）、南洋群島の島のなかの地域単位の組織（サイパン島チャランカ会など）、同窓会（パラオ小学校同窓会、サイパン高女やサイパン実業の同窓会など）、沖縄の同じ出身地ごとの組織、などさまざまな単位の組織が存在する。

しかし、私が研究を始めた当時沖縄ではほとんど南洋群島研究はなされていなかった。後に具志川市史（沖縄県中部の市で、現在はうるま市）の「移民・出稼ぎ編」の南洋群島について執筆するよう依頼を受けたことで、地域に根ざした聞き取りの姿勢や方法、市民にとっての歴史をどう記録するかを学んだ。

沖縄以外には現在活動している組織として「北海道南洋会」など、また南洋群島唯一の製糖会社であった南洋興発株式会社の関係者による「南興会」など企業の帰還者会もある。

「国際関係」というと、一般には国家と国家との関係、外交関係と見がちだが、私が専門とする国際関係学では、国家の政策と、政策の対象となる人々との相互の関係、そして庶民が国家間関係の担い手であるという視点で分析している。

「**ミクロネシアの人びとが日本統治時代をどのように認識しているか**」は興味深いテーマである。ミクロネシアで公的機関として歴史の記録を担当する歴史保存課の人たちや現地の研究者と関わるなかで、ミクロネシアにとっての南洋群島時代を明らかにするには、日本統治時代だけを切り取るのではなく、その前と後、つまり**日本の前任者であるスペインやドイツ**、また**日本の次に統治を担ったアメリカ**が、どのような統治をしたのか、のなかで捉える必要があることを理解した。

ミクロネシアの人たちにとって、日本による統治もまた植民地化という長い歴史の一部であり、彼らはどの統治国からも、自分たちなりに吸収し、自立のために努力しているのである。

3つの「記念」の年：2014年 太平洋の島嶼と日本との歴史的な関わりを象徴する年

① 日本の南洋群島占領 100周年

日本が南洋群島の統治を開始したのは、第一次世界大戦に参戦した1914年であった。

② サイパン陥落・玉砕 70周年

大本営が発表した表現は「陥落」で、現在は「玉砕」と表現するようになった。アメリカが戦闘終結と呼ぶのは、アメリカがサイパン島、テニアン島の戦闘を終結させ、占領したことが第二次世界大戦での勝利を導き、アメリカが現在まで世界の平和を維持し、繁栄させてきたとの意味を込めている。（テニアン島を占領することで日本本土への爆撃が可能となり、広島、長崎に原爆を投下した爆撃機はテニアン島から飛び立った。）

③ ビキニ事件 60周年

1954年、3月1日マーシャル諸島のビキニ環礁でアメリカが水爆実験を行った。静岡県焼津のマグロ漁船第五福竜丸をはじめとする日本各地の漁船乗組員が被ばくし、韓国や東南アジアの漁船にも、この水爆実験によって被ばくした人がいる。（マーシャル諸島は、戦前、南洋庁が管轄したヤルット支庁の一部。）

南洋群島と日本の関係を、②のサイパン陥落 70周年について

太平洋は、**3つのネシア：ミクロネシア、メラネシア、ポリネシア**ら成り立っている。大航海時代にヨーロッパ人が太平洋の島々に到達した時、名付けたのである。「ネシア」は連なった島々、諸島という意味で、「メラ」は黒、「ミクロ」は小さい、「ポリ」は大きいという意味である。

ミクロネシア 赤道南北に散在する島々のうち、日本が南洋群島として統治したのは赤道以北であった。グアム島は、米西戦争（1898年）に勝利したアメリカがスペインから買収し、グアム島以外のミクロネシアはドイツが買収した。

この**ドイツ領ミクロネシア**を第一次世界大戦後、赤道以北を日本が、赤道以南はオーストラリア、ニュージーランドが占領した。

旧南洋群島 現在、グアム島以外のマリアナ諸島は「北マリアナ諸島」としてアメリカの自治領になり、その他の島々は、パラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国として独立している。



1944年7月7日をどう思い起こすのか？ (2014年の「記念」行事から)

70年前にサイパンで何が起きたか。

1944年7月、南雲忠一・中部太平洋方面艦隊司令長官は、アメリカ軍との地上戦を戦ってきたサイパン守備隊に対して、「最後の突撃を行ったのち7日に玉砕を実施するよう」命じ、その前日6日に自決した。自決にあたって南雲は、陸海軍将兵および軍属に対して「サイパン島守備兵ニ与フル訓示」を出し、米軍に一撃を加え、「太平洋の防波堤」としてサイパン島に骨を埋めること、「生キテ虜囚ノ辱ヲ受ケズ」と命じた。

南雲司令官の死によって、日本軍の組織的な抵抗は終わる。しかし、以後も民間人も加わってのゲリラ戦が続いた。7月18日大本営は、「日本軍は全員壮絶な戦死をとげ、在留邦人も運命を共にした。」と発表した。日本の新聞は、「本土決戦も近づいている。サイパンの仇を打つためにも、日本国民はますます意識を高め、戦力増強に尽力せよ」と報じた。

内地にいる人達は、大本営の発表に接してサイパン島では軍民ともに全滅したと受けとめた。が、実際には戦闘は続き、戦闘が終わった後も民間人だけで約1.5万人が生き残った。(1945年7月の米軍収容所の人口。収容後の人口増加も含む。うち日本人は約1万人。)だが、捕虜になることをおそれ、「集団自決」をした人達もいる。サイパン島、テニアン島での民間人の犠牲は、1年後の沖縄戦に通じるものであった。

なお、南洋群島では、民間人を巻き込んで地上戦が行われた島はサイパンとテニアンだけである(ペリリュー島では引揚げられなかった僅かな民間人が、地上戦に巻き込まれたという話もある。)

サイパン、テニアンでは「戦闘終結70周年」を、どうとらえているか。

サイパンとテニアンに古くから居住するチャモロとカロリニアンは、米軍の収容所から解放された7月4日を独立記念日 Liberation Day としている。サイパンとテニアンでは、今年(2014年)を70周年として、6月に特別な式典が行われた。そこでのスローガンは「名誉の再会“Reunion of Honor”」。目玉とするイベントは、かつて敵対した日米の兵士が会って交流することであった。元兵士たちの意思はどうであろうとも、アメリカ側はこの行事に政治的な意味を込めている。

マリアナ諸島の米軍司令官は式典で、米軍のグローバルな展開を維持するために、「マリアナ諸島こそが、第二次世界大戦から引き続き継承されるべき重要な基地」だと述べた。つまり、米軍は今後もマリアナ諸島を手放さないということである。

沖縄の普天間基地の移転先はグアムを予定している。普天間の基地が移設されると、グアムの演習場、基地機能の一部がテニアンに移設せられることになっている。沖縄→グアム→テニアンと、玉突きのように基地が移転する。そういう意味で米軍はグアムと北マリアナ諸島を戦略的に一つに考え、さらに沖縄も繋げて考えている。それらを第二次世界大戦の戦勝の記憶と結びつけて、アメリカ軍は70周年にアピールした。地元では、基地移転について経済的な利益を見込んで歓迎の意見を持っている人もいるし、先住民としてのチャモロの立場から基地移転に反対し、基地に依存しないグアムの自立を目指す動きもある。式典に関する報道にはそうした意見は見えてこない。

沖縄の南洋群島帰還者会 毎年サイパン、テニアンに慰霊に訪れ、「南洋群島全域の慰霊祭」をサイパンの地で代表して行って来た。今年(2014年)、45周年という節目を迎えた。私は1999年からほぼ毎年参加して取材をしている。帰還者会は慰霊祭を沖縄県出身戦没者ならびに開拓殉難者の追悼式、つまり戦没者だけでなく戦前の生活のなかで亡くなった人たちへの慰霊もしている。サイパンの北部には、戦時に追い詰められた民間人が飛び降りた崖があるが、その麓に「沖縄の塔」をつくってここで慰霊祭をしている。また地元の人たちはカトリック信者なので、神父を呼んでミサを頼み、地元の人達も一緒に慰霊祭に加わる。

南洋群島帰還者会の平良善一会長は戦没者達への思いは消えることはなく、次の世代へ継承したいと強調している。若い世代に自分たちの歩んだ歴史や自分達の作ってきた現地の人たちとの関係をどうやって引き継いでいくか、いろいろな努力をしている。

「南洋群島」(日本統治30年)という空間と時間の広がり

日本による委任統治は1922年から始まったが、実際は1914年から南洋群島を統治しているので、総じて30年間ということになる。日本の朝鮮半島統治を1910年の韓国併合から数えれば(実際にはその前から日本

は関与しているが)、ほぼ同じ時期に、南洋群島は日本の「植民地」となり、統治期間もほぼ同じ長さにある。しかし、日本社会では南洋群島統治への関心はあまりにも低いということを指摘したい。

南洋群島：第一次世界大戦によって、日本が占領した

第一次世界大戦後の処遇は、パリ講和会議までわからなかった。日本は南洋群島を領有したかったが領有できなかった。その理由は、世界各地の民族運動が高まり、彼らを見捨てて戦後の世界秩序の安定が図れなかったこと、つまり従来のように戦勝国が敗戦国の領土や住民を戦利品として再分割できない状況になったからである。

そこで戦勝国は敗戦国の領土やその支配下にあった住民に対して、先進国が「文明の使命」によって福祉や発展を促し、自立できるまで後見人として統治するという制度、**委任統治制度**を創設した。委任統治はA、B、Cと三つの様式があって、Aから順に文明度が低く、Cは文明度が最も低い住民だとされた。



南洋群島はC式の委任統治とされた。C式の取り決めによれば、南洋群島は日本が「日本帝国ノ構成部分トシテ施政及立法ノ全権ヲ有ス...」と定められた。

A~Cのなかで、C式は受任国にとって受任国の領土に一番近い扱いを許したが、領土と認めるのではない。この点は重要である。

第一次世界大戦・敗戦国ドイツの統治下にあったミクロネシアは、委任統治地域として赤道以北は日本、以南はイギリス、オーストラリア、ニュージーランドが委任統治をすることになった。

またマリアナ諸島は、最も南端にある米領グアムとそれより北の日本の委任統治下に入った島々（テナアン島、サイパン島など）に分けられた。

南洋群島の特異性：第二次世界大戦時の悲劇を増幅。

南洋群島は領土ではないので、現地住民のチャモロや「カナカ」（現在のカロリニアンに対して、南洋庁が用いた名称）は大日本帝国臣民ではなかった。つまり現地住民に国籍は、ごく一部の例外を除いて与えられていない。

朝鮮半島や台湾は日本の領土であるので、朝鮮人や台湾人には大日本帝国臣民として国籍が与えられ、民籍名には朝鮮人、台湾人と地域の名がついている。しかし、南洋群島の場合は違う。南洋庁はチャモロとカナカに双方に対して正式な名称としては「島民」を用いた。また英語では“inhabitants of the islands”と表現している。当時の行政史料などによれば、政策当局は現地住民を民族、人間以前の存在であるという見方をしており、こうした見方が「島民」を用いた背景にあることも推測される。彼らは日本国民ではなく、「島民」であるというのが日本政府の公式見解であった。南洋庁はまた、「チャモロ」はヨーロッパ人と現地住民の混血で、スペイン、ドイツの統治、キリスト教の影響で文明化されている、と説明した。ところが「カナカ」は、日本統治時代以前から、チャモロに比して原始的な生活を営む人々だとみなしていた。



天野代三郎編『ヤップ島写真集』(7年)30頁 島民女子舞踏の一種 (YI Micronesia Collection-Yap)

第二次世界大戦後は、本人たちはその名称を使うことを拒絶している。「カナカ」はそもそも太平洋の諸地域で人とか男という意味合いで用いられてきた表現で、それをヨーロッパ人が聞いて民族集団の名称にあてたといわれる。日本統治下では、現地住民が約5万人いる中で、一割はチャモロ、その他がカロリニアンであった。

2つの意図：日本が南洋群島を領有したかった理由。

第1：経済的な理由。日本が最も進出したかった地域は、日本にない鉱物資源が豊富にある東南アジアであった。南洋群島自体には殆ど資源がなかった。日本は明治以来「南進論」が唱えられ、時代によって内容や対象は変化したものの、東南アジアへの進出には台湾経由と南洋群島経由の二つの経路が考えられた。しかも南洋群島は日本にとって初めての熱帯の勢力圏であり、企業や移民を熱帯地域に進出させる上で、南洋群島は開

拓の訓練をしたり、熱帯産業のデータを収集する、いわば「熱帯の実験地」になりうると期待された。航路や海底電線などで、日本と東南アジアを結びつけるうえで、南洋群島を中継地として利用しようと考えた。

第2：軍事的な理由。 アメリカ軍が、アメリカ西海岸の基地からハワイ、ミッドウェー、グアム、フィリピンという島唄いで太平洋を侵攻してくるといふ、いわゆる飛び石作戦を日本は想定していた。南洋群島はこれを中断させる位置にあったから欲したのである。**グアムとハワイ**はアメリカにとって重要な軍事基地であった。また、南洋群島はグアム島を取り囲むには日本にとって都合の良い位置にあった。

しかし、日本は南洋群島を領有できなかつたので、日本人をたくさん送りこむことで日本の実質的な領土にしてしまおうとした。この発想は、海軍占領直後からあった考えであり、海軍統治期からどんどん移民を入れていた。その結果、日本人人口は、海軍が占領した翌年の1915年には220人（駐屯する軍人を除く）から、委任統治が始まった1922年には約3300人に増加している。そして1935年には約5万人となり、現地住民と日本人の数がほぼ一緒になった。さらに1943年には現地住民人口のおよそ2倍、約9万6000人になった。

南洋群島は全部の島の面積をあわせても東京都、沖縄県とほぼ同じくらいである。そこに有人、無人あわせて約620（南洋庁の統計による。礁島を数えない数）の島が散らばっている。

出身地別人口では沖縄が圧倒的に多く、次に東京（八丈島 小笠原）、次いで福島である。 出身地別人口がこのような特色をもつのは理由がある。政府は海軍統治期に南洋群島の産業を何にすべきか調査し、製糖業が一番良いと見込みをつけていた。海軍統治期末に南洋興発(株)という製糖会社を設立し、同社が製糖業を独占した。日本人人口の急増は、同社が大量の移民を導入したからである。

南洋興発(株)の設立にあたっては、資金は朝鮮半島の国策会社東洋拓殖(株)から、製糖技術者は台湾や沖縄や北海道から呼び、労働者としては沖縄と八丈島から募集した。社長は福島出身の松江春次氏で、彼自身が製糖業の優れた技術者であった。南洋群島の委任統治機関は南洋庁で、南洋庁が南洋興発(株)に対して、土地から資金まで全面的にバックアップして援助した。

その結果、サイパンとテニアンに製糖業が発展した。松江氏は製糖業の成功の要として、製糖業に慣れており、賃金が安くてもよく働くということで沖縄の人々に着目した。ちょうどこの時期の沖縄も、「ソテツ地獄」と表現される大変な貧しい時期にあった。以降どんどん沖縄から移民を入れるようになった。



1920年代末から福島出身者が増えたのは、沖縄の人達が待遇改善を求めてストライキを起こし、そこで松江氏は自分の出身地である福島から移民を導入し始めたことによる。しかし、沖縄出身者の労働にはかなわず、結局、南洋興発(株)での労働、また南洋群島各地に沖縄の人が一番多く入っていった。

南洋群島では製糖業モノカルチャー経済が成立し、南洋庁財政を支える基幹産業となった。しかし、1930年代初頭からは、南洋興発(株)は製糖業にとどまらず、漁業や林業など多角的な経営を始め、南洋群島各地や東南アジア方面にも進出した。特に漁業では鰹の漁獲が増え、内地で南洋節と呼ばれた鰹節を生産した。産業の発展に伴い、日本からの移民も様々な分野に進出した。サイパン島には日本人による市街地が形成され、当時の資料や、私の取材によると、町で流れてくるのは沖縄の三線の音であったり、そばといえば沖縄そば、沖縄芝居の常設小屋もあった。それから南洋群島各地の市街地で大きな一角を占めるのは、料亭街だった。以上のように、表面的に見れば日本人の町であるが、一歩足を進めると沖縄の人たちが多く、沖縄の特徴がみえる町でもあった。しかし、当時の南洋群島社会には、「一等国民：日本人、二等国民：沖縄人、朝鮮人、三等国民：島民」という”暗黙”の序列があり、二等国民以下に置かれた人々は、複雑な思いを持っていた。

1931年の満州事変を契機に、日本は国際連盟を脱退した。がしかし、日本は南洋群島の委任統治の継続を認められた。 けれども日本は、委任統治条項に反して日本の領土としての「植民地」さながらに、南洋群島の戦略的、経済的な利用を露骨に始めた。

C式委任統治の取り決めでは、日本の防衛のための軍事施設を作ってはいけないのだが、日本が正式に国際連盟から脱退する1935年頃から、基地建設を本格的に始めた。その当時の日本では、官民あげて「海の生命線南洋群島」が叫ばれるようになった。満州は「北の生命線」あるいは「陸の生命線」と呼ばれたことに対し、南洋群島は「南の生命線」あるいは「海の生命線」と呼ばれた。

1941年12月8日に日本がハワイの真珠湾を攻撃し、日米開戦となる。日本軍は同日に太平洋上の米軍の重要な拠点であるグアム島を攻撃し、数日後に占領した。日本軍が優勢かと思われたが、アメリカ軍は日本軍の予想以上に早く南洋群島に侵攻してきた。1943年に日本軍が「絶対国防圏」と定めた、つまり、日本軍が絶対死守すべきとした圏内のサイパン島に、アメリカ軍が侵攻してきたのである。戦時の南洋群島では、米軍の本土侵攻を遮る「太平洋の防波堤」になるべしと叫ばれたが、そうはならず、「沖縄戦」に先駆けてサイパン、テニアンでは地上戦が繰り広げられたのだ。



絶対国防圏が設置されると、南洋群島で労働や防衛に従事できない民間人の引揚げが命じられた。しかし、海には敵の潜水艦や魚雷という脅威が潜んでいた。例えば、パラオからの引揚げ者は内地に直行できず、フィリピンに寄港せざるをえず、フィリピンでの戦争に巻き込まれていった。証言によれば、「引揚げるのも地獄、留まるのも地獄」であった。サイパン島、テニアン島では地上戦となったが、南洋群島の他の地域の犠牲は、艦砲や空襲もあったが、飢餓が一番ひどかったという。そもそも南洋群島の日本人は自給自足ができず、自然に生えている野菜とか果物を食べることもできず、主食は米であり、敵軍が航路を遮断すると米の移入が途絶えた。しかも1944年に入ると、大量の兵士たちが満州から「転進」という形で送り込まれてきた。食糧の供給は兵士達を優先したが、民間人、兵士ともに餓死者が非常に多かった。朝鮮人達は戦時期に、基地建設のために朝鮮半島から大量に動員された。また、チャモロやカロリニアンは日本人より厳しい状況におかれた。

このように南洋群島の戦争では、地域ごとに多様な犠牲、戦争体験がある。このような戦争体験があったからこそ、南洋群島から戦時、戦後に引揚げてきた人たちによる帰還者組織は慰霊を現在まで続けてきた。ただし、日本での帰還者組織の最初の結成（先述の南洋群島協会）は、戦時中の引揚げ者に対する内地の受け入れ機関として、である。戦後になると、親族や知り合いの消息を求めた情報交換、食べてゆくにもやっとの引揚げ者たちへの仕事や住居の斡旋、現地に置いてこざるをえなかった財産の保障を政府に要請する、などの活動を担う組織となった。

沖縄の南洋群島帰還者会の活動

沖縄の帰還者たちの組織化は戦後、もう一度南洋群島に戻りたいという「再移民」の要請から出発し、これが現在の南洋群島帰還者会となる。しかし「再移民」の要請はかなわず、帰還者会の主な活動は、現地での遺骨収集、慰霊に重点が置かれるようになった。ただし彼らが旧南洋群島に自由に渡航できるようになったのは1968年であり（沖縄はまだアメリカの支配下にあった）、この年にサイパン島に「沖縄の塔」を作った。ミクロネシアでの慰霊祭参加者数は、1976年の33回忌に1130人で最も多く、その後も増減はあるが100人から300人ぐらいの参加者があり、沖縄からジェット機を二台チャーターして直航便を飛ばしたこともある。私は大学院生の時から参加し始めた。参加者は合同の慰霊祭とは別に、自分達が暮らした場所、親族や知り合いが亡くなった場所を探して慰霊し、かつてつき合ったチャモロやカロリニアン達を訪ねて交流をしている。

沖縄の帰還者が行った重要な活動として、もうひとつ紹介したいのは、ミクロネシアの高校生を沖縄に招待したことである。1989年から2007年で、生徒103名、引率30名、総計133名を招待した。6月の23日沖縄戦の「慰霊の日」に開催する南洋群島の戦没者、開拓者の慰霊祭に参加してもらい、沖縄の観光や地元学生との交流を行ったりした。資金の問題や組織の高齢化が進んで、継続させたいという意識はあっても、終わってしまっている。このような形で世代交代が始まっていて、日本の敗戦時に10代であった人も8代になり、孫や子供達に自分たちの体験や活動をどう伝えていくかを真剣に考えている。引揚げ時に乳幼児だった人たちは、現地での生活、戦争の記憶がなく、当時大人だった人たちと違って、「慰霊や交流をするという意味を主体的に持たなければいけない。」と話している。もっと若い世代はまったく関心がない。どうしたら良いのだろうか？（本土の南洋群島協会は解散してしまった。）



聞き取りをし、体験を記録化する。現地でゆかりの場所に掲示を作ったり、地図を作って、若い観光客に関心をもってもらおうという動き。地元の行政や観光関係者は、日本人の観光客増加に結びつく、あるいは帰還者との長年の交流や思いを理解して歓迎した。

しかし他方で、サイパン島北部を中心に、日本の個人・団体が多様かつ複数の慰霊碑、記念碑を作ってきたことから（現地住民への慰霊も掲げた碑もあるものの、沖縄本島南部の沖縄戦の慰霊碑に似た状況がある）、

「日本人は記念碑をどれだけ作れば満足するのか。」という声も聞こえた。（アメリカ政府は、1994年にサイパン侵攻50周年を記念して国立公園事業の一環として記念公園を建設し、現地住民犠牲者の名を刻んだ碑を作っているがメインは米兵の名誉と犠牲を記念するもの。）

南洋群島は第二次世界大戦後、アメリカの信託統治下におかれた。

「信託統治」とは、委任統治制度を継承発展させたもので、人権の尊重や将来の独立を、文言として明示したことが委任統治とは異なる。ただし後退した面があった。それは南洋群島にのみ「**戦略的地区**」を設けたことである。戦略的地区とは施政権者であるアメリカが、世界の「平和」のためであれば、信託統治で履行すべき義務を免除され、住民からの請願も制限して良いというものである。

その「平和」を実現する手段は何かというと、原爆の開発であった。旧南洋群島に対する信託統治が始まるのは1947年からだが、アメリカは**1946年にビキニ環礁で原爆実験**を開始した。その後も、地球を何度も破壊できる位の威力をもつ実験を行ってきた。米ソ冷戦下、アメリカは核実験によってソ連に対する抑止力を示し、その「核の傘」に日本は身を寄せてきた。日本は南洋群島から引揚げたけれど、アメリカによる核実験を通じてミクロネシアに関わり、核実験はミクロネシアの人達の犠牲の上に行われてきた。

◀歴史的な関わりあいから育まれた「交流」をつなぐために▶

来年（2015年）は第二次世界大戦における日本の敗戦70周年になる。南洋群島で戦争を体験した人たちから、この70周年が「戦争を繰り返すまいと記念する最後の年」になるかもしれないという声を聞く。

アメリカ軍司令官、沖縄出身者、地元住民、それぞれの記憶の仕方がある。旧南洋群島からの帰還者たちが、それぞれの島の人たちと、戦後の長い年月を通じてどのように交流してきたのか。私が接し得たのはここ30年の僅かなものにすぎない。しかし、チャモロやカロリニアンが日本人、なかでも沖縄出身者との交流を歓迎しながら、同時に、戦前は先に紹介した“暗黙”の序列があり、かつて自分たちは「土人」、「島民」と言

われ、複雑な思いを持ったこと、帰還者の中には戦後の付き合いを通じてそれを自覚し、そのうえで交流をどう続けてゆくか、を考える人たちもいる。特に沖縄出身者は、自分たちが二等国民として扱われてきたことから、チャモロやカロリニアンの思いに近づこうとしてきた。



2014年を〇〇周年という「記念」の年とする、太平洋と日本との歴史的な関係を象徴する三つの出来事について、思い起こすことを終わりにしないようにしたい。私はこれまで色々な人たちと出会い、繋がりをもてたことで、日本に生まれ、東京を出身地とする自分を自覚し、ミクロネシア、そして沖縄など日本の各地方の人たち、戦争を体験してきた世代の人たちとどのような関係をもってきた／もつのか、を絶えず問い直す豊かな機会に恵まれたと思う。

同時に、**日本が3つの立場で太平洋の島々に関わってきた**ことを自覚せざるをえなかった。

1つ、太平洋を欧米諸国と競い合いながら支配した立場。ミクロネシアを統治しただけではなく、太平洋の他の島々（バナバ島やソロモン諸島）でも、日本という第二次世界大戦中の日本軍による占領を思い浮かべる人たちも少なくないことを知った。

2つ、移民として太平洋の島に生活の糧を得てきた立場。

3つ、太平洋の島嶼の一つとして、太平洋という生態系に生命を支えられている立場である。

私は研究を通じて知り合った人たちを通じて、太平洋のなかの日本が、この3つの立場にあることを考えさせられてきた。日本の今は太平洋との歴史的な関係から免れ得ないこと、2014年という「記念」の年を「節目」にするとは、この歴史的な関係から出発した人々の「交流」を財産に、これからの関係を築いてゆくことではないだろうか。

◀参加者との質疑応答▶ 紙面の関係上、割愛させていただきます。

国際学術文化委員会

記録 吉原浩昌（ユース活動委員会・副委員長 法政大学生）

ポルトガルのクリスマス料理

講師 アナ・マルティンス・デ・カルバリョさん

ポルトガル共和国 領事夫人 看護師

日時 2014年11月15日 12:00-15:30
場所 港区立男女平等参画センター 4階料理室



ポルトガル領事夫人として今年（2014年）来日されたアナさんは、ポルトガルの南部、スペイン国境の近くでお生まれになりました。

大学都市コインブラで教育を受けられ、首都リスボンの病院で看護師として勤務されていました。1年前結婚されたばかりです。

ポルトガルは、1543年に種子島に、日本に初めての“西洋人”として、着いて以来、鉄砲やキリスト教などの西洋文化を伝え、日本の歴史に計り知れない大きな影響を与えてきました。

私たちが日常なにげなく使っている日本語になっているポルトガル語には、カステラ、コップ、パン、カルタ、タバコ、ボタンなどたくさんの単語があります。

1143年ポルトガル王国が成立しました（カスティージャ王国による承認）。国民の大多数がローマ・カトリック教徒です。クリスマス・イヴには、教会のミサに出たあと家族が集まって、いろいろな種類のクリスマス料理をいただくそうです。講師は「今回、そのほんの一部しか紹介できないのが残念です。」とおっしゃいました。

海洋国家ですので、魚介類を食材とすることが多く、また、かつての植民地から持ち込まれたシナモンやサフランなどの香料や、コリアンダーなどのハーブ類が多く使われ、オリーブ油も相当量使われます。

会場ではポルトガル語、英語、日本語が飛び交い賑やかでした。ポルトガル語については会員の西村アメリアさんがボランティアで通訳を引き受けてくださいました。有難うございました。

ラガール地方のたこ料理 (Polvo a Lagareiro)

タコはまる一匹を使います。オリーブオイルを入れた湯で茹でたタコに、ジャガイモを加えて、タコの茹で汁をかけてオーブンで焼きます。コリアンダーのみじん切りを飾ります。



コリアンダー・スープ (Sopa de Coentros)

玉ねぎとニンニクをみじん切りにしてオリーブ油でいため、カボチャ、トマト、ニンジン、リーク、ズッキーニを加えて、さらに炒めます。それをミキサーにかけて、塩、コリアンダーを加えます。



ファロффィアス (Farofias) 卵のデザート

白身を泡立て、砂糖入りメレンゲをつくります。レモン入りミルクを沸騰させた中に、メレンゲを入れ、固まったところに取り出します。ミルクに黄身とコーンスターチを加えて、柔らかめのカスタードクリームをつくります。カスタードクリームの上から、メレンゲにシナモンパウダーを添えたものをかけます。



飲み物として 名産のポルトガル・ワインをいただきました。

故郷のラガール地方はオリーブがたくさん採れるところだそうです。コリアンダーをふんだんに使う西洋料理は珍しいと思いました。

(世界の味文化委員会 松崎加寿子)

フィリピン共和国大使館訪問

日時：2月10日（火）午後2時

場所：港区六本木

フィリピン共和国大使館は六本木5丁目にあり、港区立麻布区民センターの南隣で、周りは東洋英和女学院の小学校、中・高等学校、鳥居坂教会という閑静な環境の中に建っています。2013年の11月、過去最大級といわれる台風がフィリピンを襲い、大きな被害が出ました。その折、港ユネスコ協会として、ささやかなお見舞いをさせていたのが縁で、このたびの訪問が可能になりました。

広い重厚なホールに招入れて下さり、文化担当官アンジェリカ・エスカローナさん（Ms. Angelica C. Escalona）が「ロペス（Lopez）駐日フィリピン大使に代りまして皆様を歓迎いたします。」と英語で、にこやかに話し始められました。文化部の並木香奈美さんが通訳して下さいました。モルテルさん（Ms. Mary Joy Duran-Mortel）も同席して細やかにお世話下さいました。



東京のフィリピン大使館は、世界各国にあるフィリピン大使館の中で大きなものの1つとのこと。日本にはフィリピンの方が、中国、韓国に次いで3番目に大勢の方が住んでおられます。その方々への諸々のサポートなど多くの事務手続きをこなし、また、日本国との友好関係を築いておられます。

フィリピンは、地理的には飛行機に乗れば4時間、熱帯の動物、植物そして海の自然などが迎えてくれる魅惑の島々からなります。バナナ、マンゴー、パパイヤ、パイナップルなどのトロピカルフルーツの産地で、中でもバナナは日本のスーパーマーケットの90%がフィリピン産と伺いました。火山、地震、台風などは日本と似通った環境です。「台風」は、フィリピンから日本へ輸出しているんですよ！とのジョークに、笑い声が沸き起こりました。

「わが国は7107の島々から成り立っています。日本はいくつの島からか、ご存知でしょうか？」という思わぬ質問に会員の誰も答えられずにいたところ、「6000以上の島々ですね」と教えていただいた次第です。

歴史的には、300年以上のスペイン統治時代の影響で、80パーセント以上の人たちがローマン・カトリック教徒であり、文化と伝統は今もなお日常生活に根強く残っているそうです。その後50年に及ぶアメリカ統治下では、「民主主義」と「英語」を受け入れ、国民の多くが英語をしゃべることが出来ます。公用語はフィリピン語と英語。1946年7月4日独立しました。スペインとアメリカの影響が残る、多様性に満ちた文化の国です。



概要のお話を頂いた後、美しい大自然を映し出した映像での紹介になりました。自然環境の豊かな中で、いろいろな人々との文化が多様に交じり合い「フィリピン」が成り立っていることが分かりました。

フィリピン諸島の自然 ビーチリゾート、セブ島、ダイバー、海の生き物の宝庫

ワンダーアイランド 自然、動物、人、癒し、ボホール島、チョコレートヒルズ、メガネザル（ターシャ）、料理、エステ

アジアンバロック 16世紀はじめのスペイン王朝期、新大陸開拓、カトリック布教のためにやってきたマゼランがセブ島に上陸し、そこからバロック朝の建築、文化がもたらされました。16世紀に造られたマニラの城壁“イントラムロス”に現存する世界遺産の多数の教会。アジアとヨーロッパの出会いの歴史物語

メトロポリタン“マニラ” フィリピン心臓部、政治・経済・文化の中心部

◆ **質疑応答の時間**に移りました。その中から、主な内容を記します。

国旗 赤、青、白の3部分から成り立ち、赤は勇気、青は高潔な理想、白は平和を表します。白地には黄色の太陽の8光線と3つの星が表わされています（黄色は自由）。これはスペインから独立の際の最初の8つの州と、3つの星はルソン、ビサヤ、ミンダナオの3地域を示しています。通常は「青」を上にして掲揚しますが、戦時には「赤」を上にして掲げた例があります。これはあってはならない掲げ方ですね。

日常使う言葉 「英語」は小学校から学びます。「理科・算数」は最初から英語で、「歴史」はフィリピン語での授業です。政府関係、ビジネスの世界は英語です。国民の多くの皆さんは英語、フィリピン語（タガログ語）そして家は地元（ネイティブ）の3つ言葉を使いこなします。

若者の関心ごと、流行は？ 西洋のポップミュージック、映画、ダンスに興味があります。Jポップ、Kポップ、日本のアニメ・映画、特に最近では、「るろうに剣心」が熱烈に歓迎されています。キリスト教信仰ということ

で小さい時から「ミサ」に行く人が多いのが日本との違いですが、「受験戦争」は同じですね。

主食 「お米」です。田舎での朝食は「お米と魚」が多い。西洋料理のレストランやファストフードのお店も流行っています。一般的な嗜好として、「酸っぱい味」と「甘い味」が好まれています。家庭料理の「シニガンスープ」は酸っぱいし、「アドボ」という豚肉や鶏肉の煮込み料理は、酢・醤油・胡椒の味付けです。

女性の地位が高いですね？ 確かに、公でも家の中でも女性が社会で大きな役割を担っています。スペイン時代以前でも村の首長に女性になっていた歴史があります。家庭内でも平等。男性は「大黒柱」、女性は「明かり」とも言われ、給料はすべて奥さんへ。ビジネス世界でのオーナー、マネジャー、そして政府の要職でも活躍が目立ちます。アキノ、アロヨという2人の大統領を輩出しました。24名の中の6名が女性議員です。「安倍首相も日本の女性の社会進出をプッシュしていますね。頑張ってください！」とエールを頂きました。

アンジェリカさんの今日の装い スカートのように腰に装っているのは「マロン」という筒状で綿素材の民族衣装とのこと。多様な使い道がありブランケットとしたり、荷物をまとめるのに使ったり、インドネシアの「サロン」は一枚布で巻式になっていますが、マロンは筒状になっています。

ホールに飾っている「ピーニャ」（パイナップルの葉の繊維でできた素材）製の紳士シャツは高価とのこと。バナナの繊維で作られたブラウス（鮮やかなグリーン色）は、若者たちがモダンに着こなしているとのこと。伝統的な素材は今日人気があるそうです。

先程の映像で「石」で造られた立派な教会が映っていました。建築の歴史に関してスペインとのかかわりは？ 1521年マゼランの上陸後、スペイン統治を受けてから300年以上の歴史があります。それ故に建物、宗教、食物、衣装に大きな影響がありました。建物に関して、マニラのような中心市街地は「石造建造物」が多く、地方では、木、竹が多い。台風や自然災害が多く、気候に合うココナツやヤシを建材としている所が多い。

看護師さんが海外で活躍されていて、優秀な実績を上げていますね。 1970年、80年代以降、優秀な若者が海外で活躍しているのは事実です。「ブレイン・ドレイン、つまり頭脳流出」が言われています。今政府は、優秀な人材はできるだけ海外に出さないようしていますが、コントロールはできていないのが実情です。日本での「看護師試験」は「日本語」なので合格率が低いです。残念ですが。

フィリピンの方は「英語」にも強いので、世界で活躍されていますね。 今日でも、フィリピン人は世界中に進出しています。海外で活躍しているのは900万人以上にも及んでいます。

世界でフィリピンのレベルの高い女性が活躍していますね。特定の家の出身の方だけでなく、もっと広い範囲の人々が活躍できるようにするには？ 少数の人たちが富をもっているのは事実です。アキノ大統領は、不正を無くす透明な政治を目指しています。教育制度の見直しもしています。教育費は「無料」ですが、「教材」「文房具」が買えないことで教育という機会に巡り合えないことも多々あります。中流階級の教育を見直して、その人たちが政治に一層かかわっていくことを心がけています。

私は大学生で東南アジアの学校との交流に興味があります。学生の交流について教えてください。

上智大、外語大とか多くの大学との交流実績があります。日本政府も「洋上大学プログラム」などを推進しています。一昨年の台風被害の時も大勢の学生さんが手伝いボランティアに来て下さった例もあります。



◆ いろんな角度からフィリピンの今日を直接伺うことで一層の親近感が沸いてきました。美味しいマンゴージュースを頂きながら、会場に陳列している民芸品、楽器、衣装を拝見したり、装ってみたいり、鉄琴のような楽器をたたいたり、観光パンフレット、学生語学留学も冊子を見せて頂いたり、和気あいあいの中で楽しい時間を過ごさせていただきました。



予定を30分もオーバーしての楽しく有意義なフィリピン共和国大使館訪問の一日でした。帰りの道々、鳥居坂を下りながら、英雄「ラプラプ」のこと、マゼランの世界周航の中でのフィリピンとの出会いの歴史のこと、そして魚の王様“ラプラプ”のことなどをじっくり調べて、実際に訪ねてみたいという思いが募ってきました。

皆さまも様々な自然と文化のフィリピン観光を思い描いて、日本から4時間という身近なお隣の国を訪ねて友好の輪を広げてみませんか！
会員開発委員 委員長小林敬幸

2015年 新年会員懇親会

日時：2015年1月25日（日） 正午から

会場：イタリアン レストラン 港区白金台

会員親睦の会としての新年会を港区の白金台「イタリアン レストラン グリフォン」にて 23名の会員の参加により開催しました。会場は、国立科学博物館付属“自然教育園”の杜と“東京都庭園美術館”を前にしての環境素晴らしいところにあり、この数年愛用しているブッフスタイルのレストランです。

秋山雅代常任理事の新年の挨拶、高井光子会長の開会の言葉、松本洋副会長の乾杯の音頭で会が始まりました。料理を楽しみながら、自由に行き来しながらの交流の時間です。日ごろお名前は聞いていたり、ブレイク誌上で馴染みがあったり、また、委員会で同席していても、話しをしたことのない方どうしが、あらためて自己紹介などを交わす姿があちこちで見られました。



昨年、港ユネスコ協会にご入会下さった木曾功相談役（内閣官房参与、前 UNESCO 代表部大使）から「ユネスコが取り組んでいる ESD(持続的開発のための教育)の推進をはかることの大切さや、文化関係施策では一件でも多くの日本の遺産を世界遺産に登録したい。」とのお話をいただきました。

三輪公忠名誉会長からは「文化遺産を守る姿勢が大事」とユネスコ活動の思いを語っていただきました。

全員が交流を深めるために、皆さまから一言ずつ話していただきました。「世界の料理を担当、年に3回開催し、合計100回を超えました。参加された方に喜んでいただいています。」「学術文化委員会を担当しています。」「広報ブレイク・インターネット委員会で活動しています。」「文化体験委員会で通訳のお手伝いをしました。」「日本の世界遺産が増えていることに感動しています。」「次の世代がいかにして平和を引き継ぐかが課題です。ユース活動、特に留学生とのかかわりを大事にしています。」「茶の湯体験教室に参加しました。外国の方が日本の文化、おもてなしの心を学んでいる姿に感動。自分が日本のことを知らないことを自覚した。日本のことを再認識した。」「お茶の会に外国の方が大勢参加してくれて嬉しかった。」「外国の方が日本文化を一生懸命勉強しているのを見て感動、刺激を受けた。」「しばらく休んでいたが、昨年から復帰、委員会に属して活動を再開しました」「子育てを終えてから活動に参加しています。」等々、ユネスコ活動の中での感想、抱負、そして趣味などのお話を伺いました。



「日本の世界遺産が増えていることに感動しています。」「次の世代がいかにして平和を引き継ぐかが課題です。ユース活動、特に留学生とのかかわりを大事にしています。」「茶の湯体験教室に参加しました。外国の方が日本の文化、おもてなしの心を学んでいる姿に感動。自分が日本のことを知らないことを自覚した。日本のことを再認識した。」「お茶の会に外国の方が大勢参加してくれて嬉しかった。」「外国の方が日本文化を一生懸命勉強しているのを見て感動、刺激を受けた。」「しばらく休んでいたが、昨年から復帰、委員会に属して活動を再開しました」「子育てを終えてから活動に参加しています。」等々、ユネスコ活動の中での感想、抱負、そして趣味などのお話を伺いました。

次のプログラムは、お楽しみ会です。

☆ソプラノ歌手園田直美さん（藤原歌劇団に所属、オペラ、コンサート各方面でご活躍）の独唱。

プッチーニのオペラ ジャンニススキッキより「私のお父さん」、「帰れソレントへ」「忘れな草」「彼女に告げて」そして久 譲作曲の「スタンド・アローン（坂の上の雲）」、マイフェアレディから「踊り明かそう」。最後は 椿姫から「乾杯の歌」を、皆さんでグラスを掲げて歌い、「ブラーヴァ！」の掛け声もかかりました。

☆ビンゴゲーム。 25のマス目に自分で「都道府県名」を書き入れることからゲームがスタートしました。

タテ、ヨコ、ナナメのどれか5こが揃ったら“ビンゴ!”。「景品」は会員からの差し入れの品々でした。

閉会の言葉は、友金守理事の、「今年一年お元気で頑張りましょう！」の気合いの入った一本締めで、めでたく締められました。

最近入会したばかりの方、イベント、講演会に参加の方、委員会に入って活動されておられる方など、いろいろな形で、港ユネスコを支えている大勢の会員の参加で、お正月のひと時を楽しく過ごしました。お蔭様で今後の活動での新しいエネルギーが漲る会になりましたこと、お礼申し上げます。



会員開発委員会

委員長小林敬幸 副委員長三好 潤

書道体験教室

日時：2014年12月6日（土）13:30～16:00

会場：港区立麻布区民センター

企画内容

1. 書道の歴史の説明
2. 講師によるデモンストレーション
3. 書初め体験
4. 記念写真と懇親会



アンケートに回答下さった方のお声をご紹介します。

- *大変参考になった。
- *楽しかった。
- *これを機会に書道をやりたいと思いました。
- *手作り感があり暖かく良かった



茶道体験教室

日時 2015年1月24日（土）13:30～1600

場所 港区立生涯学習センター203号室

ウクライナ、カザフスタン、バングラデシュ、パキスタン、フィリピン、ポーランド、マレーシアの国籍の方々、そして日本の方々をご参加下さいました。



企画内容

1. 茶の湯の歴史の説明
2. 講師によるデモンストレーション
3. お点前の一部を体験する
4. 全員がお茶を味わう
5. 参加者の自己紹介

アンケートに回答下さった参加者の声は、

- *日本文化の奥深さを再確認した
- *面白かった
- *難しかった
- *外国人の方々とも触れ合うことが出来、有意義でした
- *非常に良い企画と思います



大勢の皆さんにご参加いただき、和やかに過ごす事が出来ましたこと、嬉しく思います。

文化体験教室委員会 担当常任理事 平方一代

事務局便り

【今後の行事予定】（詳細は別途、チラシやホームページでご案内します）

☆4月28日（火）19:00～20:30 **港ユネスコ協会 2015年度総会**

会場：港区立生涯学習センター305号室

☆4月15日～8月5日 英会話初級クラス、毎水曜日、18:30～20:30、コース全14回、

講師：マーク・マードック先生

会場：港区立麻布区民センター

☆6月13日（土）12:00～15:30 アルバニアの家庭料理

会場：港区立男女平等参画センター・料理室（みなとパーク芝浦 2階）

【ご寄付、ご寄贈品などの、ご協力ありがとうございました】

(A) 日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金（奨学資金として）

★11月28日（土）第2回世界の味文化紹介会場での募金 30,000円

(B) ミンダナオ子ども図書館への寄贈品を12月9日に発送しました。

【ご協力のお願い】 常時受け付け中です。事務局までお願いいたします。

*日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金

*ミンダナオ子ども図書館への寄贈品（衣料品（除毛織物）など：新品・中古品（洗濯済）
寄付金（送料分）

港ユネスコ協会事務局（火～金 10:30～17:30）

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp

ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp>

■編集後記■

◆先週の日曜日、東京マラソンを観戦しに行きました。自分がマラソンを普段からやっているからというものあるのですが、やはり頑張っている人を応援することはよいものですね。（桐渕泰雄）

◆2015年となり高齢社会の真っただななです。日本古来の魚や大豆を食する習慣を維持し適度に体を動かし健康に留意すると、病気になることも減り健康寿命期間（介護されなくても自立生活できる期間）が増えます。介護保険や国保医療費支出軽減が将来世代へ負の遺産減らし、持続可能な社会創生への道開拓への一助となりえるでしょう。高齢者も元気なほうが幸福に過ごせます。（坂下妥子）

◆明治の文豪夏目漱石の作品を読み返している。「こころ」「三四郎」を読了したころ朝日新聞が復刻版の掲載を開始した。長編だけでなく「余と万年筆」「自転車日記」等の比較的短い作品も面白い。これらに共通するのは、主人公たちの心象風景や取り巻く社会環境の描写が生きていること、また、今では死語となった言葉も、文字として見ると情景がイメージとしてはっきり浮かび上がることである。思考、想念、更に概念は文字化されて初めて明確に認識できることがよく分かる。（須田康司）

◆高校同期のひとりが永年趣味として能面彫りに励んでいる。先日、彼を含む面打ち25名による合同展があり、旧友グループで見に行った。能面に加え、狂言面、舞楽面、神楽面など100以上の面が、あるものは明示的に、あるものは抑制的に、人間の喜怒哀楽を湛えていた。伝統文化鑑賞の後は柴又へ足を伸ばし、トラさん通りで会食歓談を楽しんだ。（柵橋征一）

◆春の選抜高校野球の「21世紀枠」3校の1つに、母校「和歌山県立桐蔭高校」が選ばれ、53年振りに甲子園の土を踏むという。旧制「和歌山中学」から引き継ぐ長年の活躍が認められたとのこと。「おまけの出場だね！」と周りからからかわれている。大学生の時に甲子園に応援に行ってから、半世紀以上が経っていることに、啞然としながらも、やはり嬉しい。（高井光子）